

巻頭言

地域と共に歩む国際理解教育とは

西 田 富 男

兵庫県海外子女教育・国際理解教育研究会

去る11月9日、近畿ブロック国際理解教育研究会兵庫・篠山大会を開催いたしましたところ、近畿2府4県および全国各地から多数のご参加をいただき今後の取り組みに弾みになるご示唆をいただいた。新教育課程改訂後の‘国際理解’分野のカリキュラム編成が課題になっている昨今、篠山市・近隣の学校と地域が点から線、線から面へと、学校と行政そして篠山市民団体「NPO」が一同に会して～共に人とふれあうヒューマンネットワークを活用して～を柱に実践発表できたことに、参加者の一人として篠山地域全体の国際理解への関心の深さに頭が下がる思いがした。

研究会午前の部は、全海研大会及び各ブロック研究会でも初の公開授業一小・中学校一を行った。小学校6年生が帰国教師から世界の現地の様子を、中学校では保護者から身近なアジア地域の料理を食材から作り上げていく工夫を、それぞれゲストティーチャーを迎え、児童・生徒にとって篠山と世界’の文化の違いを肌で感じ取ったであろう。この授業での体験が世界のことを見聞きした、いねば多文化に接し、自国の文化の再発見につながり、自ら考え、判断し、感性豊かなたくましい子どもの育成、即ち「生きる力」の一つの道筋とも捉えられる。

午後の部では、テーマ「多文化共生の学校づくり」を柱にしたシンポジウムを行った。パネラーのNPOの方からはボランティア支援養成講座の開設のこと、兵海研からは外回り子女教育の現状や但馬における四季折々の自然を生かした実践発表があった。

講師の佐藤郡衛先生（東京学芸大学国際教育センター教授）からは、参加者へ「児童・生徒にどんな力をつけさせたいのかを見つけ出す努力を惜しまずに研究を積み重ねて欲しい。そして会話を通して人と人との関わりを大切に、‘学び’の体験を重視した交流の場を持ち、各地域の素材をより深く見つめなおすことが即ち世界との交流の掛け橋―国際理解―に通じるものがある。」と、現場の我々にご助言をいただいた。

会湯宿篠山近隣では、‘篠山国際理解センター’が外国人・日本人がともに暮らしやすい地域づくりをめざし、「だれでも、いつでも、どこでも」を合言葉に交流の場となっているこの活動に注目したい。地域からの‘草の根運動’は1980年代ごろから全国各地域で、都市ではなく地方都市から発信がされてきたことを記憶している。

日本の歴史を振り返ると、今も伝統・文化がその地域に根付き若者に継承されている現状を、再度、我々が次世代を背負う子ども達を前にした時y地域の素材（人材活用など）を大いに生かす努力をしたい。今後大人と子どもとの交流が大きな情報の宝庫となり、他の地域および関係機関との人と人とのパイプが太くなり、県下そして全国、地球規模のネットワークへと広がれば、その地域の‘味’を共有することが可能になるのではないだろうか。その行動を起こす源の担い手は、国際理解教育に関心を寄せている我々自身の課題でもあると思う。